

立命館大学大学院文学研究科 修士論文要旨

精神医学について

フーコーによる「診断の活動」を論じること

哲学専攻 原 田 寿江子

フーコーによる精神医学についての考察は、精神医学や哲学の分野に限らず様々な場面で援用され今日に至る。そして、フーコーの精神医学についての考察と常に比肩する形で論じられてきたものとして、とりわけ反精神医学 (anti-psychiatre) を挙げる事ができるだろう。

両者は共に、精神医学について懐疑的ないしは批判的考察を展開してはいるものの、フーコーの精神医学についての考察は、十分な検討を見ないまま、曖昧な形で反精神医学との相似を強調される傾向にあることも事実である。

反精神医学とは一般的に、イギリス R・D・レインや D・H

クーパー、アメリカのトーマス・サス、フランスのマノーニなどを代表的な論者とし、精神科医の側からの、一種のムーヴメントとして一九六〇年代後半から活発化した精神医学批判のことと、歴史を遡ることが出来るだろう。時を経て、多岐に渡る分野と絡み合いながら反精神医学的主張は、現代でも顕著である。現在では反精神医学と一括することも差し控えねばならぬほどその内実は多岐に渡る。

修士論文ではフーコーの精神疾患患者に対する優しい眼差しを言外に包みつつも、正確にはフーコーが精神疾患患者を「弱者」としたことも、彼らを擁護する主張を展開したわけでもないことに重点を置き、フーコーの精神医学についての考察を照射した。その際、現在活躍の場を拡充しつつある反精神医学的主張への敬意を心情的には保ちつつも、厳密には反精神医学と安直に比肩しえないフーコーの精神医学についての考察の独自性を論述した。

フーコーの精神医学についての考察は、文学や言語について、あるいは性についての諸問題を提起し、かつ、反精神医学とは一線を画し、精神医学が諸イデオロギーと結びつく過程を積極的に論じている。

先行研究が示す通り、フーコーの史観や言語観は、哲学的な考察においては厳密さに欠け、破綻している部分もあるだろう。また、フーコーが主張するような史観や性についての認識は、

その独自性や新しさゆえになかば宿命的に舌足らずな側面を併せ持つことにもなるだろう。あるいはその主張を不愉快に感じる人も少なくないだろう。しかし修士論文では、そのようなフーコーについての批判を意図的に避け、フーコーの精神医学についての考察の独自性を『狂気の歴史』から『性の歴史』に至るまでの展開のうちに論じた。

『万葉集』 兄弟姉妹の恋歌論

日本文学専攻 堀内寛子

『万葉集』の恋歌の多くは男女間において歌われているが、集中には少数ではあるが同性間で歌われた例がみられる。そのうち文人たちの間で交わされた恋歌については交友論として近年議論されてきたが、血縁関係にある者の間で交わされた恋歌については肉親愛の表出とされることもあり、これまであまり問題とされてこなかった。本論では特に兄弟姉妹で交わされた恋歌を取り上げ、なぜ血縁関係にある者の間に恋歌が必要であったのか、恋歌本来の機能を持たないこれらの恋歌にどのような意味があるのか考えた。

第一章では大伯皇女歌(二・一〇五、一〇六)を取り上げた。姉が弟大津皇子にむけて詠んだ二首を「二人」の用例などから恋歌であるとし、なぜ姉弟間で恋歌が詠まれたのか考えた。二首は大津皇子謀反事件直前に弟が斎宮であった姉を訪ねた際に詠まれた。記紀には古代の兄弟姉妹の姿を窺い知ることのできる物語が所載されているが、そのなかでサホビコ・サホヒメ兄妹の伝承に「夫よりも兄を愛しく思う」とあるように、大伯皇

女も謀反を起こす弟に対し恋歌を詠むことによつて姉弟の絆を強めたのではないかと考えた。

第二章では長皇子歌（二・一三〇）を取り上げた。兄が弟弓削皇子に与えた当該歌を「恋痛き我が背」や「いで通ひ来ぬ」の表現から女の立場で詠んだ恋歌であるとし、なぜ兄弟間で恋歌が詠まれたのか考えた。兄弟の血統の高さは集中に「ワガオホキミ」などと歌われたことから知られるが、歌が詠まれた持統八年から文武三年の時期は両皇子にとつて政治的にも不遇であつたと思われる。記紀にはウミサチヒコ・ヤマサチヒコのように兄弟が対立し争う物語が見られるが、長皇子が女の立場で恋歌を弟に詠んだのはそのような兄弟としてではなく兄弟姉妹の中で最も絆が強固であつた「イモ・セ」として歌を詠むことによつて不遇な時期に弟との結びつきを強めようとしたのではないかと考えた。

第三章では大伴田村大嬢歌九首を取り上げた。姉が異母妹大伴坂上大嬢に贈つた歌を「恋ふるは苦し我妹子を」（四・七五六）、「いま盛りなりわが恋ふらくは」（八・一四四九）などの表現から、また卷八・一五〇六、一六二二番の歌がそれぞれ『拾遺和歌集』、『古今和歌六帖』に男性歌として享受されていることから男の立場で詠んだ恋歌であるとし、なぜ姉妹間で恋歌が詠まれたのか考えた。記紀には「イモ・セ」や兄弟ほどもく姉妹の物語は所載されていない。古代における姉妹の結びつ

きがそれほど強くなかつたことを示しているのではないだろうか。しかし田村大嬢にとつて妹坂上大嬢は家持と結婚し大伴家の中心となつていく人物であり、異母姉妹ではあつても結びつきを深めたい相手であつたに違いない。田村大嬢が男の立場で詠んだ恋歌を妹に贈つたのは、姉妹としてではなく絆がより強固である「イモ・セ」として歌を詠むことによつて妹との結びつきを深めようとしたのではないかと考えた。

『源氏物語』論

夕顔から浮舟へ

日本文学専攻 近藤 彩

源氏物語の最後の舞台である宇治に登場する浮舟は、夕顔に類似した人物造型によつてゐるということ、古来より指摘されてきた。源氏物語成立に近い時代に菅原孝標女が『更級日記』のなかで、「光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ」と両者を比較するわけではないが、夕顔と浮舟を並列させて自分の憧れの女性であることを述べてゐる。

似た女の登場ということについての問題箇所を指摘しはじめたのは、萩原広道の『源氏物語評釈』である。

又夕顔君のうかれたゞよひるに。浮舟君のよるべなきをむかへたるも。照對の法にてながしの院と宇治宮とをむかへ。源氏君と頭中将と二かたなるに。薫君と匂宮との二かたを對へ。五條の宿の八月十五夜と。三條の家の九月十三夜とを對へて。共に御車にのせて出給ふさまにかゝられたるも正しく照對をしらせたる也。さて一人はへんぐゑのため

にとり殺され。一人はこたまにかすめとられたるなども。すべて同じ筆づかひなる中に。たてたる心なき女の。よからまじき趣をにははせたり。

(総論 此物語種々の法則ある事 五三頁)

このように浮舟と夕顔という女性の性格を並べてその類似を論じる研究の中では、作者紫式部は浮舟物語は夕顔を想起させてゐるという見方で論じられてきた。類似した女の登場から、夕顔の物語の要素を浮舟の物語に与えることは、何を意味してゐるのであるうか。浮舟の物語の中で、夕顔の物語が果たす役割とは何か、また浮舟の物語は夕顔の物語の再現となり得るのであるうか。

萩原広道の挙げる「すべて同じ筆づかひ」が、どういった作用を与えて夕顔と浮舟をつくりだしていくのかをみていきたい。

第一章では、「人物紹介について」、第二章では「夕顔物語と浮舟物語の共通点について」を述べる。それらの中で、「夕顔と浮舟の人物紹介」、「人物設定」、「女の性格表現」、「場面設定」は、外枠の構造だけを考へるならば、あたかも夕顔物語の再現に浮舟物語がなるようにみえるが、男性からの視点や、三角関係の配役を分析するとそのまま類似構造を受け継ぐものとはならないことが分かる。

また、「女の性格表現」に関しても、女性の行動を表現と対比すると夕顔と浮舟の性格が似ているとは言えない。「場面設定」の展開の中で移動という行動が夕顔物語を想起させるとすれば、その後には「物の怪」がくるべきはずであるのに浮舟物語には現われない。ここから、夕顔物語と浮舟物語の共通項から徐々に構造が変わってくると言える。

第三章では「障害としての正妻」を挙げ、夕顔物語と浮舟物語における正妻が抱く嫉妬の度合いを考えてみる。そして、第四章では「夕顔物語と浮舟物語の相違点について」を述べる。浮舟の自殺が自身の葛藤からだけではなく、他者からの軽率な言動がよりその行動を促したのではないかと考える。

浮舟物語は夕顔物語の舞台を使って類似構造を持つが、完全なる再現にはならなかった。浮舟物語は夕顔物語の再現に留まらず、浮舟以前の女性たちを想起させると考えられるのである。形代を挙げれば、藤壺から紫上、大君から浮舟へと続くことであり、不義密通に関しては、藤壺、女三宮、浮舟である。そして、出家願望から、出家を遂げるという発展を考えれば、紫上と浮舟がつけられるのである。

結論は、夕顔物語の類似造型の中で浮舟物語はそれ以前の物語の繰り返しをし、浮舟はそれらの女性を一人で請負い、少しずつ発展させながら、新しい行動として出家を遂げることによって誰の物語の繰り返しでもなく、人形ではない浮舟ができあ

がると言える。

ゆえに、夕顔物語と浮舟物語は単純に再現とは言えないのである。

高村光太郎論

彫刻家に於ける詩作の必要性について

日本文学専攻 佐藤 香純

本論は、高村光太郎の詩業をその彫刻家としての人生の里程に於いて再評価する試みである。図らずも詩人として著名になったが、私見によれば、光太郎とは一貫して彫刻家としての自覚の下に生きた人であり、その詩業の背後にはいつも彼の彫刻の表現原理を形成して行った独自の造型美学（美術論であると共に美術家としての彼の生き方を規定した人生観でもあった）が働いていた。そのロジックの形成過程に立脚しながら彼の詩の表現理路を筋道立て、彼の詩の根底を貫いて来た精神が如何にその彫刻家としての探求と分かち難く結び付けられていたかを明らかにすることで、世の評価とは逆に彫刻家・光太郎こそ詩人・光太郎を生み出した当の者であった点を主張して行きたい。

第一章は本論全体の枕として、青年期を迎えた光太郎が父の手からの独立を賭けて自己内面の世界を育み始める明治三十五年前後を中心に当代彫刻界の混迷状況を概観し、彫技と統合で

きない内面世界を表現する道として光太郎が言葉の世界の理路を要請して行く経緯を彼の短歌と日記を資料に解明する。その生涯の格闘の背景となる日本彫刻界の問題点を整理しつつ、彫刻の表現としての自立の課題と彫刻家・光太郎の自立の課題とを相即させ、その探求の開幕に彼の詩業を開幕を位置付ける試みである。

第二章は、光太郎の彫刻と彫刻家としての人生の立脚点を定めこれを規律した造型美学。これはロダンを始めとする印象派及び象徴詩以降のフランス芸術から学んだものであることが留字直後の資料から導き出される。の理路を基軸に第一詩集『道程』に収められた明治末期から大正初期にかけての作品の表現機構が短歌の様式を離れ独自に編み上げられて行く道筋を解明する試みである。同時に、彼に於ける新しい彫刻（造型美術としての彫刻）の最初のモデルとされた智恵子が詩集の中で彼の志す彫刻家としての人生と美学に同伴させられて行く道筋を解明する。

詩集『道程』刊行を経て漸く具体化し始めた光太郎の彫刻業が実作の経験を積んで彫刻論を見出すまでに成熟して行く大正末期、再び復活した詩業の機能を問うのが第三章である。この時期、彼はこの世とは別個に自転し得る表現世界独自の見地を獲得するが、この見地に立つた彫刻業が経済生活と背反して行くという悩みを抱えた。芸術世界の自立と経済的自立の背反と

いう問題に直面して、己の彫刻家としての立脚点を問い直して行った役割を同時期に生み出された一連の詩篇「猛獣篇」の作品構造から解明する。

常に混沌として変転して行く人間の内面世界を詩作によって規律し続け、そこを造型の立脚点として問い続けた点において彫刻家・光太郎の葛藤を再評価しつつ、己の美学に対してあまりにも教条的だった彼の生き方が自縄自縛に陥って行くサイクルに学びながら、伸びやかにしかも筋の通った生き方をするには何に忠実に何に拘らず生きて行けばいいのかということを書者なりに模索した。

志賀直哉論

夢と想像の作家

日本文学専攻 東 松 由里子

今回私はある見方で志賀直哉という作家を考えてみた。夢と想像の作家として志賀直哉を考えたのである。従来の志賀直哉論の殆どは、彼の優れた写真描写に言及し、近代リアリズムを確立した作家として志賀直哉を称えるのがもはや常識のように行われてきた。そういった評価を否定することが本論の試みではない。そうした面を認めつつも、現実世界のみならず、「夢」の世界をも描く作家であること、その「夢」の世界を描くことが志賀直哉にとつてどういう意味を持つのかというところまで考えて行こうと思つたのである。

その為にまず第一章で、志賀直哉のリアリズム作家としての従来の評価を、年代を追って見ていった。「夢」を考えるならば、初めにこれはしておかなければいけない作業だと私は考える。それらを踏まえた上で、改めて志賀直哉的リアリズムとは何か、作品、志賀自身の言葉などから考えていった。その結果、志賀直哉のリアリズム論と一口に言っても、その解釈は実に

様々で決してくくり同一視できるものではないこと、定説化していると思われた過去の論文の中に、志賀直哉の「視覚」の鋭さと特異さを指摘して、夢の文学への足がかりとなる論があることを知ったのは大きな発見だった。次の第二章で、夢を描く作家としての志賀直哉像の実態に迫る。具体的には志賀直哉が夢への関心を持ち始めた時期、青年時代までさかのぼり、泉鏡花に熱中した読書歴、娘義太夫への熱中などの事実を洗い出す。その上で志賀直哉の描く「夢」が、「視覚」をキーワードとして成り立ち、さらにその視覚が「イメージ」を喚起させるものであることに注目して、志賀文学の独自性を考える。志賀のリアリズムが現実世界のみでなく、虚構世界にも向けられているのみならず、それは現実世界とまったく同等に、時には現実世界を上回るほどの価値を与えられていたことに着目した。志賀直哉のリアリズムが「夢」の世界にも向けられているという事実は、写実的リアリズムだけを描く作家という従来の評価をくつがえすという点で意味を持つ。最後の第三章では、志賀直哉の「夢」の中でも「想像力」が、志賀直哉にとって重要性を持っていたことについて考察した。具体的には『クロウディアス』の日記』という作品を取り上げて、その実態に迫る。「強い自我貫徹の人志賀直哉」が、実は自身の想像力を潜在的に恐れる一面を持ち合わせており、それは「夢」に大きな意味を認めていた作家の態度から来るものだったことを、作品、志

賀自身の言葉から論証していった。最終的には、従来のリアリズム作家としての評価とは別の、「夢と想像の作家」としての志賀直哉像を確立することを、本論の目標とした。

《擬連珠》はなぜ製作されたのか

東洋思想専攻 小西瑞枝

一、構成について

はじめに(四枚)・第一章(三十六枚)・第二章(十三枚半)・むすびに(六枚)・参考文献・注(五枚) 一三三頁

二、内容(要旨)

*序(はじめに)・庾信の文学作品は「郷関之思」といわれることが多いが、それは『周書』の伝によるものである。「郷関の思い」と感じるかどうかは、個人的な受け止め方である。庾信の三大作品ともいえる《擬連珠》には、「郷関の思い」だけではないものが読み取れる。

このことから、今回の研究としてとりあげた旨を述べた。

*第一章・1、南北朝時代の「梁朝の滅亡による人心及び国土の荒廃や惨状を述べた。作品から断片的に語句を挙げ、『南史』から「人相食」という記述の引用により、人心の荒廃を検証し、又、国土(故郷)の荒廃については、百済国の遣使がその荒廃ぶりをみて哭した、という史実を述べ、及び《擬連珠》第十により展開した。

西魏の進攻による苦しみ。史実と作品から、検証し、李國熙氏の論文を引用して庾信が「自身の郷関の思い」だけを述べているのではないことを論証した。

2、政権担当者について。《擬連珠》第一及び第十九・第三十二より解釈した。

3、庾信の意識について。許逸民氏謂う非類という言葉より、《擬連珠》第二十三をあげ、庾信が《擬連珠》という作品を製作するに至った意識について、考察した。

*第二章・1、庾信の創作態度について。林怡氏の論文を引用しながら庾信作品から、創作に関する語句を挙げ、その考え方を論じた。

2、連珠という文体について。『文体明辯序説』から文体の定義をし、実作品として、《擬連珠》第四十四を検証した。又、典故について考察し、その用い方について、庾信の特徴を述べ、「連珠」という文体がこの作品に合致したものであることを論証した。

*結(むすびに)・庾信の生き方について、《擬連珠》第三十六・三十三・四十三を挙げた。最後に、自分がなぜ《擬連珠》を取り上げたのかということも記した。

*参考文献については、多くあるが主として文中に引用したものを挙げた。

「李賀と古楽府」要綱

東洋思想専攻 伊崎孝幸

中唐の詩人、李賀は数多くの楽府作品を今に伝えていて、その数は、伝存する李賀の詩の約半数にも達している。彼の楽府作品の一番の特徴は、従来指摘されてきたように、それが音楽を伴って、歌唱されたということである。だが、論文ではそのことには触れず、楽府の別の側面、すなわち、楽府という文字形式のもつ伝統に目を向けることにした。

李賀という優れて独創的な詩人が、楽府という文学形式の伝統のなかで、何を為したのかということ論じるのが、この論文の主題である。その方法は、古辞を含む先行作品と李賀の作品とを比較対照することを基本としている。先行作品の例としては、主に李白のものを取り上げた。李白は単に楽府題の詩を多作したというだけでなく、どの作品も新しい工夫が凝らされ、優れたものが多いからである。主に李白のものと比較することで、李賀の工夫がどのような特色をもつか、よりはっきりとつかむことができると考えた。

論文は三章からなっている。第一章では、李賀の楽府題の詩

がどのように先行作品を受けて書かれているかを論じている。彼の楽府作品は、古辞あるいは先行作品と主題が同じであるものは少なく、措辞や場面設定などの点で、もともとなる作品に多く依存しながら、主題的に何らかの変化が加えられているものが多い。そのような作品の代表的なものとして、李賀の「難忘曲」と「大堤曲」を取り上げている。

第二章も、やはり第一章と同じく、李賀の楽府作品がどのような工夫を凝らしているかを見ているが、ここでは特に彼の工夫が李白をはじめとする他の詩人の工夫と、どのように違っているかという事に焦点を絞って論じている。取り上げた作品は、「追和柳惲」、「塘上行」、「夜坐吟」の三首である。この三首は、李賀の楽府題の詩のなかでも、とりわけ先行作品を強く意識して書かれているものである。いずれの詩も単独で読んだ場合、ほとんどその意味するところが分からない。あらかじめ先行作品と比較して読まれることを前提としているのである。論文では、これらの詩が、どれだけ先行作品と比較されることを要求しているかを、古辞などとあわせて読むことで示している。

第三章は、やや視点を変えて、彼の楽府作品のうちに見られる自己表現について述べている。楽府という文学形式は、我々が考えるような意味での自己表現を盛る器としては、適当なものではない。しかし、そこにもやはり作者の精神が表れている。それを読み取るのがこの章の目的である。作者と作品の関係

如何に捉えるかということとは、文学を学ぶものにとって、大きな問題である。私は敢えて前の二章とは異なるテーマをここで扱うことにした。

李賀の楽府題の詩は、先行作品との対比を強く意識するあまり、往々にして、その詩だけでは意味を為さなくなってしまう。彼はそのことを承知した上で、擬古楽府を製作している。作品自体の完成を犠牲にしても、対比による効果を求めているのである。この論文で、そのような李賀の特異な創作態度の一端を示すことができたのではないかと思う。

ヘンリー・ジェイムズの『アメリカ印象記』 におけるニューヨークのイメージ

英米文学専攻 南 到申子

この論文の意図は、ヘンリー・ジェイムズの『アメリカ印象記』(The American Scene)に描かれている多種多様なニューヨークのイメージを考察することによって十九世紀後期から二十世紀初頭にかけてのアメリカ社会の諸側面の特質を浮き彫りにすることにある。言うまでもなく、ジェイムズは十九世紀中葉から二十世紀初期にかけて多くの作品を残した作家であり、アメリカ(ニューヨーク)で生まれたにもかかわらず、長い間ヨーロッパで著作活動を続け最終的にはイギリスに帰化している。従って、アメリカをヨーロッパとアメリカの両視点から見つめることができた複眼的な作家である。

ジェイムズは晩年(61才の時)に一九〇四年八月から一九〇五年七月にかけてアメリカを再訪しており、『アメリカ印象記』はその時の旅をもとに書かれた紀行集である。ジェイムズはこのアメリカ再訪以前の二十年以上もの期間を海外(主として、

ヨーロッパ)で暮らしていた。旅をした地域は基本的にはアメリカの東海岸であり、ボストンからフロリダにまで脚をのびしている。この旅の間にジェイムズは一度ならずニューヨークを訪れている。

『アメリカ印象記』に描かれているニューヨークの様々なイメージの背後には、世紀の変わり目の時期におけるアメリカ人の道徳、マナー、気風、文化、ジェンダー、人種差別、ナショナル・アイデンティティーといったような、単なるイメージ描写を超えたもつと深いテーマが潜んでいる。この論文では、ニューヨークのイメージをこのようなテーマ別に分類して分析することにより当時のアメリカ社会の特質をあぶり出している。複眼的視点に立つことができたジェイムズの目に映ったニューヨークにはネガティブにはポジティブに描かれており、この「恐るべき都市」のイメージ描写にはジェイムズの相反する感情が反映されている。一方では、旧世界(ヨーロッパ)からの移民が自分たちに固有の民族的特質を喪失し文化的に無色化されていく様を嘆き、「針刺しに刺し込まれた無数の待ち針」と表現されている摩天楼に象徴される商業主義や金銭欲や美意識の欠如を嫌悪しており、他方では、あらゆる現代的なものの運命を占う巨大な実験室としての新世界 ヨーロッパの揺籃期の姿ではなくヨーロッパの未来の姿を映しだしている可能

性を秘めた国としてのアメリカを受け入れたいという感情も垣間見られる。ジェイムズの目に映ったニューヨークのイメージには、大きく変貌を遂げようとしていた当時のニューヨークの、そしてアメリカの諸相が鮮明に映し出されているのである。

「家族」の觀念史

十九世紀不二道の性差をめぐる言説を中心に

史学専攻（日本史） 津久井 瑞 絵

現在、「家族」は核家族に当てはまらない「家族」の在り方や従来の「家族」を前提としないライフスタイルが模索されている。その一方で、理想的で典型的な「家族」のかたちとして、「男は外で働き、女は家庭を守る」という固定的な性別役割分業が、依然、当たり前のようにされている。それは、「子どもを産むのは女である。だから女には母性があり、育児をするのは当然である」というような性と性別役割が結びつけられて捉えられているからである。セックスはジェンダー秩序の根拠として語られるのである。このような觀念はどこからどうやって来たのかを探るため、本論文では、新たな「家族」観の誕生期とされる十八世紀の社会意識として、不二道の言説に注目し、「家族」観がどのように変容していったのかを分析した。

不二道が体系化され発展していった十八世紀後から十九世紀前にかけては、継承すべき「イエ」とそれを相続する「子」への意識が高まる時期であり、陰陽観に基づいて男女の「和合」

が重視されていた。陰陽とは、対立する概念であるがその根源は一つと見なされ、この二つの「和合」によって万物は生成されるとする觀念である。この觀念が農耕における増殖・豊饒や男女の生殖と結びつけられて広く浸透していたのである。

不二道の思想も同様であり、男と女は相補的な一对のものとして捉えられており、今日のような生殖機能の非対称という觀念に基づいたセックスの認識は見られず、妊娠・出産や性別役割は全て「父母様」を最高神とする「宇宙」「自然」に回収されるのであった。「女は内、男は外」に代表されるようなジェンダーは存在していたが、その時のジェンダーは絶対的なセックスで語られることはなかった。「子」を作り産むということは、一人の仕事ではなかつたのである。そして「父」「母」「子」の関係は仙元大菩薩を媒体に、「御恩」と「孝」で語られていた。それは十九世紀前、陽が陰より優って上手く「和合」して万物を生成できていないという現状を打破して、男女の「優劣なき和合」を実現させるために、陰陽の価値の逆転、つまり女性（陰）の上位を主張するまでに発展した。

しかしながら、不二道は明治維新を経て、「西洋」が入ってきたことで陰陽観は「頑固な陋習」とされ、男女の性差は、日本古来の普遍的・絶対的なものとされるようになったのである。この時、「身体」は「宇宙」「自然」と切り離され、「身体」そのものの機能に着目して語られることとなった。ここに、セ

ックスを根拠にジェンダーを強制する「近代家族」の根源を見ることが出来るだろう。

文久〜慶応期における

徳川将軍家内部の路線対立

「違勅問題」への対応を軸に

史学専攻（日本史） 奈良勝司

本稿は、「違勅問題」期に徳川将軍家（幕府）内部に見られた路線対立に着目し、幕末政治史研究に新視角を提示するものである。日米修好通商条約の「無勅許」調印より生じた「違勅問題」の背景には、天皇は「皇国」の最高責任者であるという認識体系が存在した。そこでは現行の条約は無効、徳川将軍家は攘夷実行機関とされた。一方、西洋列強諸国側の認識体系では、条約締結者の徳川将軍家が国家主権者であり、また一旦締結した条約の履行・遵守は当然であった。つまり、「違勅問題」に際して二つの世界認識体系が正反対の見解を示すこととなり、徳川将軍家は朝廷と西洋列強諸国の板挟み状態に陥る。しかしそれゆえ、ここでの徳川将軍家の対応は、認識体系が重層するこの時期に国内最大の政治勢力がどんな世界認識を表明するのか、という意味を必然的に持っていたのである。

文久三年三月、参内した将軍家茂に下された勅書は、近世

「公儀」としての徳川將軍家を否定し、攘夷の実行機関と再規定するものであった。この奉勅攘夷体制の下、幕政を左右するようになったのは急進開國派の旗本層と一橋慶喜ら水戸藩勢力であった。前者は攘夷の勅命を拒否、奉勅攘夷体制自体の解体を図り小笠原率兵上京を推し進めていく。一方、後者は攘夷の勅命を遵奉し前者と激しく対立、計画を失敗に追い込む。

この後幕府は横浜鎖港路線を進めていくが、その中心となったのは、従来は鎖港反対派とされてきた一橋慶喜であった。慶喜は政事総裁職松平直克と共に横浜鎖港を主張して参与会議を解体、「元治国是」を期に鎖港業務の独占に成功するが、これは幕府内における親藩・家門勢力の台頭と譜代勢力の衰退を意味していた。彼らは反対派の排斥を図り「六月政変」を引き起こすが、松平直克も失脚し横浜鎖港路線は破綻する。慶喜達は大幅な政策の転換を迫られ、「違勅問題」の焦点は条約の許容の「仕方」へと移っていく。

この後幕府要路には急進開國派が復権、純粹な譜代大名ではない阿部正外、松前崇広が老中に就任し、閥老層の譜代独占の原則は崩壊する。阿部らは一旦は、「六月政変」以後台頭した「復古派」との政争に敗北、「復古派」は參勤交代復活等「反動」政策を展開して京都の武力制圧を試みるが失敗する。通説では状況認識の甘さが失敗の原因とされたが、真の理由は急進開國派の在京幕閣の「共闘」による「復古派」排除工作にあった。

阿部や松前は「復古派」の巨魁である老中諏訪忠誠と牧野忠恭を排除、將軍進発態勢を創出する。

進発実現に「共闘」した両派の矛盾は、慶応元年九月の四ヶ国艦隊攘海侵入事件で極限に達し、外国側の兵庫開港要求に対し、阿部は幕府独断での海港を、慶喜は勅許の獲得を主張し激しく対立する。急進開國派は將軍の辞職・東帰を試みるが、これは通説で言われるような突発的な計画ではなく、「違勅問題」期を通して一貫した彼らの路線に基づくもので、奉勅攘夷体制以来の朝廷の制約から逃れ徳川將軍家の自立化を目指すものであった。

「違勅問題」とは、朝廷と西洋列強の板挟みに陥った徳川將軍家が、勅命の遵守 条約の遵守を両極とした究極の選択の狭間で揺れ動いた問題であり、同時に「世界」の中に「日本」をどう位置づけていくかという世界認識体系の問題でもあった。一橋慶喜を中核とする親藩・家門勢力が、小笠原率兵上京を推進した直參旗本層や阿部・松前両老中が、を主張する代表であった。紆余曲折を経ながら慶応元年には幕政中枢に進んだ両者は、四ヶ国艦隊攘海侵入事件が起こると激しく対立する。前者にしてみると、攘夷の不可能性が明らかになったといえ、条約を認めるには「皇国」の長たる天皇の勅許が絶対に必要であった。一方後者の立場に立った場合、条約はそれ自身によって保証され、また征夷大將軍でなくても条約の締結主体

が国家主権者であった。慶喜の条約勅許獲得は、このような路線を葬り、あくまで天皇を中心とする体系によって西洋列強の認識体系を丸ごと包み込むものであった。この「条約勅許」を契機として、以後の政局の焦点は、どの政治勢力が朝廷を掌握するかということに移行していく。言い換えるならば、將軍辭職、東歸計画が失敗に終わった瞬間、以後の政治体制は、程度に差はあれ朝廷をトップに据える形となることが運命付けられたのである。慶喜の「条約勅許」獲得は、「違勅問題」の決着であると同時に、ある意味では近代天皇制の「内定」であった。

幕末明治期の陵墓形成の歴史的意義

地域社会の陵墓管理を中心に

史学専攻(日本史) 上田長生

一九世紀の日本の近代化は、封建的身分制の解体を伴う、「民政権力」の形成過程である。本稿ではそうした動向を、地域社会の価値と対抗・編成変えしながら、近代天皇制のイデオロギー・「価値」が構築されていく過程と捉え、陵墓形式を素材に検討を加えた。そうした対抗・編成変えは地域社会の陵墓管理に集約的に表出するが、その点への先行研究の踏み込みは十分なものとは言えず、そうした研究状況の克服を課題とした。

まず一八世紀末頃から、泉涌寺等での仏教祭儀による近世天皇家の先祖祭祀や神武天皇陵を問題化する議論が現れ始める。天保期には徳川斉昭が、「祭政教一致」論に基づく山陵祭祀を組み込んだ整序された議論を提起する。それは、内憂外患による体制的危機意識から構築されたもので、朝廷祭祀による民心掌握が課題とされた。また、こうした陵墓祭祀を見出ししていく動向は、他の諸領主等の先祖顕彰等と共時的な動向であった。

文久期には、領主層結集を目指す国家祭祀の再編の中で、泉涌寺にも一定の役割が期待され、一時的に朝廷・幕府の厚遇を受けた。攘夷祈願という対外危機への対応から、より直接的に領主層を結集・統合するために、神武天皇陵や政治的責任を負うべき「皇霊」が見出されていったのである。しかし、孝明天皇葬送に際しては、山稜奉行・諸陵寮によって泉涌寺の排除が企図され、その位置を低下させつつあった。

維新後、明治神祇官制の展開過程においては、皇霊祭祀も新たに創出される国家祭祀の一つの柱となった。それは、中央の皇霊祭祀が幕末期の山稜祭祀が持つ役割を中央で実現する場を造ることもあった。諸陵寮では、泉涌寺の廃止を含めた具体的な神仏分離案が検討され、以後の陵墓政策の課題もほぼ出揃っていた。しかし、中央での皇霊祭祀の確立や、明治初年の「穢」の質的転換によって、「穢」観を軸に展開した陵墓の神仏分離は徹底されず、寺院との関係もひとまず維持されるのである。

他方、地域社会における陵墓管理は、当初から祭祀と日常的管理が求められた。慶応二年に成立する長役守戸体制は、濃厚な在地性と顕著な地域性を有する「由緒的結合関係」であった。長役守戸のポストをめぐることは、地域指導者層における角逐や利益誘導的動向も見られた。そうした意味で、守戸は「役儀」として受容され、彼らの「自発性」を調達しながら地域社会に

陵墓が立ち現れた。しかし、もう一つの長役守戸のメリットである苗字帯刀等をめぐって、当初から地域社会内での身分的な問題を内包しており、地域社会で軋轢・波紋が生じた。長役守戸体制は、地域社会において陵墓を陵墓として認識する段階、陵墓との関係を新たに結び込む段階であったと言える。

明治七年には、最終的に陵墓と寺院の区別を設け、地域社会での「由緒的結合関係」を断ち切るため、また、諸皇族墓の管理の必要性から、長役守戸が廃止され陵墓掌丁が置かれる。陵墓掌丁体制は、各府県毎の差異を孕みながらも、急速に府県官吏化を遂げ、地域社会の規定性は格段に低下し、寺院殊に泉涌寺の関係も切断された。

陵墓事務は、明治一年には内務省社寺局から宮内省に移管され、社寺行政や神祇事務から切り離されて、事務的には皇室内に限定されていく。明治一六年には陵墓掌丁も宮内省付属となり、各府県毎の特徴すらも希薄化し、管理が「平準化」するのである。こうした事態を、陵墓制度の形骸化と捉えた建議を踏まえて明治一九年に諸陵寮が復興される。確立に向かいつつある近代天皇制下においては、宮内省中に諸陵寮が定置され、陵墓への崇敬は道徳・規範の問題へと変転していくのである。

大正期における「中間階級」と「文化生活」

史学専攻（日本史） 吉 国 弘 之

本論文では近代日本の大正期における中間階級とその階級によつて営まれた「文化生活」を研究対象としている。当該期は生活や文化、そして公共や社会について、日本人が考察の目を向け始めた時代だったと言われており、その様な動きに伴い多くの人々が社会問題や生活に関わる身近な問題に対して関心を示していくことになった。それはそれまでも存在していた様々な問題がまさに「我々の問題」として認識されることを意味した。同時に、世界的なデモクラシーの流れの中で、特権階級のみではなく、「最大多数者の最大幸福」がこれまで以上に叫ばれるようになった状況も忘れてはならない。国民生活の安定向上を図るためには（それが国家の発展とも結びついていた）、国民各自にある程度の生活権を認める方向へと進み、「生活」そのものだけではなく、「人間らしく生き」ることや生活の「仕方」を考え始めた。しかし、全ての人が「生存」することだけではなく、「人間らしく生きる」ことができるようになることは不可能に近い。個人々々が描く「生き方」など同じ

ではない場合が多いからである。当該期において、このことが現実に重大な問題となったのは利害の異なった様々な職業を営み、また資本家や労働者という枠では捉えることのできない人々（例えば公官吏や教員等）の増大であった。その様な人々は当該期において「中間階級」と認識されており、本論文では特に当該期における「中間階級」の研究者の一人である森本厚吉を取り上げた。森本は衣食住に渡つて合理的で効率的な「文化生活」を営むものとして「中間階級」を認識していた。多くの人々が「生活」に関心を持ち始め、その上で尚且つ「最大多数の最大幸福」な実現させるならば、森本が提示した一つのあり方としての「中間階級」や、「一見モダンな新しい「文化生活」は同じ生活を営み、各々が似た思考をもつための一つの方法であった。森本はまたそのことにより大多数の人が安定した生活を送れると考えたのであった。一方で「中間階級」として捉えられることが意味を持ち始めると、それに見合わないと思はれた少数の人々が差別されていく構図を作り出した。具体的には都市における社会問題の原因をその人々に押しつけることにもなつていったことも忘れてはいけない。

このように「中間階級」や「文化生活」という一つの枠がつけられていくことを問うことによつて、個人の生活の問題が国家の問題に影響を与えるようになる中、当該期における各々の自由や平等の意味のあり方がどのようなものであったのかを知

ることができるとある。

戦時下の青壮年組織

大日本翼賛壮年団をめぐって

史学専攻（日本史） 金 守 寛 士

ファシズムイデオロギーによる統制の拡大強化は、新体制運動に代表されるようにおおむね失敗したことが示すとおり、統制の拡大強化は日中戦争（一九三七年）以降の戦時体制の論理で進められていった。日露戦争後の地方改良運動の重要な担い手であった地域における青壮年組織は戦時体制の論理でその内容と実態を変えながら存続していく。本稿で取り上げる大日本翼賛壮年団（一九四二年）は戦時体制の論理によって組織された青年団の戦時形態であり、大政翼賛会傘下の一国民運動団体であったが、御用団体に止まらず大政翼賛会に対して「自立」性を保持していく。筆者はこの「自立」性に着目し、戦時体制の論理のもつても意のままにならなかった大日本翼賛壮年団という組織について考察を加えるものである。

第一章（壮年団運動の挫折 大日本翼賛壮年団結成をめぐる軌轍）においては、青年団運動から派生するような形で、一種の社会教育団体として結成された壮年団期成同盟会及び加盟

した地域の壮年団が、昭和恐慌を画期とする社会の変化、更には日中戦争以後の戦時体制の強化、近衛新体制への取り組みと挫折といった経過を経て大日本翼賛壮年団という組織に変化していく過程を考察した。

第二章（翼賛壮年団改組をめぐる状況）においては、大日本翼賛壮年団の上部機関である大政翼賛会に対して「自立」性を保持し得たその理由として従来の見解では戦時下最後の翼賛選挙（一九四二年）において各地方議会に翼賛壮年団関係議員が進出したことよって地方基盤が固められていたことによるとされてきたが、実際には地方議会への翼賛壮年団関係議員の占有比率は高いところでは埼玉県五〇パーセント、兵庫県四四パーセント、低いところでは宮城県の一五パーセント、佐賀県の一・二パーセントという数字に見られるようになりばらつきがあり、また後年占有比率が低い、つまり地方基盤が低いはずの佐賀県団が翼賛壮年団中央本部から離脱するという行動に出ている。この点から筆者は翼賛選挙よりも道府県団長改選（一九四三年）に着目した。佐賀県を含む大多数の自治体で既成勢力から距離を置く軍人団長（予備役将官）が誕生した（それまでは大政翼賛会地方支部事務局長が兼任するケースが一般的）。この道府県団長改選以後、下部の町村団を含め大政翼賛会地方支部と翼賛壮年団地方団との二元化状況が招来した。道府県団長改選を契機とした人事権の掌握が、「自立」性の保持に重要な

役割を果たしたと考える。

第三章（地方村落における青壮年組織 京都府竹野郡木津村現網野町の事例をもとに）では、木津村を地域事例として地方村落という基底レベルでの翼賛壮年団の活動状況と道府県団長改選の影響が実際にどのように下部組織に波及していたのかについて考察を加えた。道府県団長改選の影響を受けて、基底レベルにおいても翼賛会木津村支部と木津村翼賛壮年団という二元化状況が現出した。

大日本翼賛壮年団は道府県団長改選を通じて「自立」し、その「自立」性はかつて青年団、壮年団が町村政の下支えという地域利害に密着した形で発現していくというのではなく、聖戦貫徹という戦時体制の下支えとして時には供出運動の強制に見られるように地域利害からも乖離した形で発現していったものであった。

中華の形成と越

史学専攻(東洋史) 齊藤博紀

現在の江蘇・浙江省は古来より「呉越」と総称され、同一の文化圏と見なされてきた。文献における呉の初見は『春秋』成公七年、越は同じく『春秋』昭公五年と、その差はわずか五十年であり、一見すると呉・越の同質さがうかがえる。しかし、呉は太伯の後裔を称すなど、古く春秋期より中華秩序の中に包摂(「中華化」)されていたことが分かっている。一方、越に關してはいつ中華化されていたのか具体的に言及されておらず、中華化に関して呉・越の異質さが改めて了解されるのである。本稿はこのような問題意識の下、越の中華化の時期と呉と同質に見られるようになった時期について考察したものである。第一章では『史記』越世家に見える越系譜の成立過程を見る。中華内の諸国王は全て系譜的に古帝王に附加という、中華化が行われている。越王も『史記』越世家で、古帝王禹やその子孫少康との系譜的な関係が見えてくる。元來『史記』編纂以前には、「禹と公稽の關係」と「越建国の周代におく」という二つの考えがあったのだが、『史記』編纂時に急速にそれらが関係化し

この時期、越王も系譜的に中華化していったことが分かる。

第二章では越地方の政治的変遷を追う。越は春秋戦国期以降常に辺境という位置付けであったのだが、秦の統一によって制度的に中華化を見せる。しかしこれも完全ではなく、ようやく武帝期の東越平定によって、政治的な安定がもたらされることとなる。政治的な中華化を武帝期に求めることができるだろう。

第三章では、人士の活躍を追うことによって越地方の文化の発展を見ていく。後漢成立前後より始まる江南の開発は、越地方にも中央との接触を可能にさせた。『越絶書』の登場をふまえて、『呉越春秋』の登場は、越地方の独自性と中央の文化受容を見せている。後漢中期から始まる文化的中華化の様相がうかがえる。

越地方が中原から離れているという地理的差異は、隣接する呉地方と比べても、その中華化に時間差を生じさせることとなった。この時間差は、三国孫呉政権成立によって解消されることとなる。これは同時に呉・越が中華の中心となったことをも示している。この時期以降呉・越両地方が基本的に同質視されることとなったと言えるだろう。

中国山地における

水田稲作の展開と生業の多様性

広島県山県郡戸河内町を事例として

地理学専攻 赤石直美

本研究は、山間地域における生業変化のメカニズムを明らかにすることが目的である。既存の研究では、生業の変化の要因として、土地所有構成や米作の経済的利点が特に注目されてきた。そこで本稿は、農業経済学や農学の成果をふまえ、明治初期から昭和初期間の山村における畑作から稲作への生業変化を、双方の労働力の比較から明らかにし、まず稲作と畑作の生業システムを示した。その結果、以下のことがわかった。

中国山地の西部広島県山間地域では、江戸末期から明治期にかけて、農林水産業から、狩猟、採集、手仕事品の生産まで多様な生業が営まれていた。生業の多様化は、危機回避だけではなく、閉鎖された地域が他の地域と交流する手段であり、山村は地形的に閉じた世界であるように見えて、狭小な交通路を通じて周辺地域や都市と関わっていた。そして、この多様化には水田稲作を選択することによる、労働力と肥料の軽減が密接に

関係していた。

山間地の稲作展開について戸河内町を事例に見ると、人口と耕地面積のバランスが保てていけば、山村における水田稲作での自給自足が可能であった。社会条件等の問題をふまえる必要があるが、山村の水田稲作でも最低限の食料維持が可能な地域があったことがわかった。そして、林野利用だけではなく、山間地における水田稲作にも自然環境との相互作用がみられ、自然環境の影響を受けつつ、豊富な水量を背景に棚田が展開されていた。一方では、自然を改変し、自然に働きかけることで稲作が展開された地域があった。

その水田を開墾した要因として、稲作では労働投下量が畑作よりも少ないという生態的特性があった。山間地であっても、麻栽培は稲作に比べ肥料の回数や除草の回数が多く、稲作よりも労働力を必要とすることがわかった。よって、他の生業と複合させるためには、労働投下量の少ない稲作を選ぶ必要があった。すなわち、人々は投下労働量の少ない稲作へ移行することで、さらに余剰時間をつくり、その時間を他の生業へ使うことができたと考えられる。そして生業は、多様性を維持したまま持続されたのである。加えて、稲作と畑作では必要な肥料の量についても差異があり、畑作の方がより多くの肥料を必要とした。下肥消費量が人口による生産量を上回っていた上殿村では、自給肥料が不足した状態であった。しかし、稲作へ移行し

たことで自給量と必要量とのバランスが保てるようになった。

さらに、肥料の獲得は山地の植生景観にも影響を与え、稲作中心の猪山集落では雑木林が維持されたのに対し、上殿村のような畑作村では集落周辺の山林が禿山化されていた。堆肥を作るための過剰な搾取が森林を荒廃させていた。この荒廃は林業と農業の複合にも影響するため、肥料の少ない稲作が重要であった。

以上より、生業の多様性は、労働力の配分を背景に畑作、稲作、手仕事など個々の生業の関係は、切り離されたものではなく、システムとして密接に関わりあっていた。これらの関係の維持は、その間を結ぶもののバランスが保たれることにより可能であると考えられる。そこに人と自然環境との相互作用があると考えられ、その関係の崩壊と山村の過疎化との関連が今後の課題である。

大阪府における

オフィスビル開発と業務地域の形成

地理学専攻 河原 大

【研究目的】

オフィススペースを創出するオフィスビルと開発・供給する不動産資本を対象に、供給過程と業務地域形成のプロセスを経年的に検討する。従来、大手資本を対象とした研究成果はあるが、中小資本も含めた考察は皆無である。また、周辺地域を含めた空間スケールでの検討は、オフィスの郊外化を考える上で必要である。そこで、不動産資本を類型化し、そのタイプの違いが業務地域形成に作用する影響を考察する。その際、第二次世界大戦以前から現在に至る時間軸のなかで、開発に関わる制度的な規制や緩和の実態も踏まえて、大阪府における業務地域の形成メカニズムを捉えることを目的とする。

【研究方法】

研究対象地域は大阪府域とする。業務地域の空間的分化は、開発をおこなう多様な不動産資本の活動の違いによることを考え

る。そのため、不動産資本の詳細な類型をおこなう。また、不動産資本の開発行動と業務地域の形成を歴史的過程から検討する。さらに開発における要因を、二項ロジスティック回帰分析とコレスポンデンスアナリシスから検討し、空間的な開発性質の特徴を因子分析により考察する。

【結果・知見】

オフィスビル開発の変遷からみた業務地域形成…業務地域の形成過程は、戦前におけるCBD地区の初期形成、一九五〇～一九六〇年代における既存業務地域の更なる集積と拡大、一九七〇年代における延伸的拡大による郊外化、一九八〇年代の開発投資の激化と開発性質の変化、一九九〇年代以降における開発余波と偏在的な大規模化による新しい業務地域の創出にまとめられる。因子分析では、都心指向の開発と賃料の安価な開発という基本的運動と、ターミナル開発や公共主体の開発という資本の性質やバブル期、一九九〇年代の開発といった時代性を反映した特定の運動とに開発の性質が大別された。不動産資本への着目とその類型化…オフィスビル開発における資本の差異は、業務地域構造に重層的な階層性を付与する。また、大手資本 独立系資本 グループ系資本という開発のサイクルが生じ、開発集中時期のずれから導かれる大手資本の大規模開発と中小資本の小規模開発の二重構造は、業務地

域に空間的な偏在性をもたらした。

開発における民間主体と公共主体との均衡関係…業務地域の形成には民間主体の開発誘導と抑制のみならず開発主体としての積極的都市経営が主導された。

オフィスビルにおける付加価値要素…因子分析から都心指向の開発にOA・IT化の要素がみられる。

バブル経済期以降の行動論理…二項ロジスティック回帰分析の結果、付加価値を高める大規模化やオフィスビルの質的向上は決定的な行動理論の変革にはつながらなかった。しかし、賃賃料の価格格差は、開発の地区よりも個別のオフィスビルの属性に影響される。

全国に対する大阪府の独自性…全国的に早期から業務地域形成が確立されてきたが、因子分析の結果、大手資本の影響よりも独立系資本の果たす役割が強いことが判明した。

【今後の課題】

不動産資本を類型化することにより資本がオフィスビル開発に様々な開発方式の違いを与え、その意思決定の違いが業務地域の構造に多様なパターンを与えることが判明した。しかし、開発性質と開発サイクルをより動態的に把握するためには、需要・供給両面での立地および開発プロセスを検討し業務地域の階層的構造の実態を詳細に把握する必要性がある。

農村多元情報システム(MPIS)にみる

農業情報利用の地域的条件

長野県朝日村・山形村の事例から

地理学専攻 宗 圓 孝 之

目的

一九八〇年代の日本では、様々な形態の地域情報化政策が行われた。当初、これらの政策は事業地域の活性化を達成しようとする楽観的に考えられたが、近年では様々な疑問が指摘されている。地域情報化政策の事例研究は、これに対して、ソフトの充実や情報メディアの改善など、主として技術的な観点から解決の手段を求めてきた。その一方で、「地域の情報化」そのものに関する研究が、地理学を中心に行われてきた。その中で、情報化を行った地域の様々な地域的条件が、情報化の効果に影響を与えることを展望してきた。この視点は、既存の事例研究や、地域情報化政策のコンセプトにおいてみることはできない。そこで本研究は、農林水産省ほかの主導する農村多元情報システム(MPIS)事業を取り上げ、二つの事業指定地域を比較考察することにより、MPISの利用の地域差を分析し、地域

差を規定する地域的条件を解明することによって、MPISの事業展開について提言を行う。

方法

第一段階として、長野県内のMPIS事業指定自治体に対して、アンケート調査を行った。この調査によってMPISに対する行政の評価を把握した。そして第二段階において、東筑摩郡朝日村・山形村の二地域を取り上げ、農家に対して聞き取り調査を行った。聞き取りの項目としては、MPIS利用の程度、他の情報メディアと併用の有無、作目ごとのMPISとの関係、農業経営規模、専兼業の区別等について注目した。

結果

両地域に共通して、次のような一般的な傾向がみられる。農家はMPISや一般の気象情報などの情報を、取捨選択して利用していること、スイカやレタスなど、MPISの情報が多く用いられる作目と、無支柱トマトなど、ほとんど用いられない作目があること、大規模専業農家はMPISの詳細な情報を求め、小規模専業農家・兼業農家はテレビの天気予報といった単純な情報を求めていることである。

既存の研究は、MPISの普及には技術的な向上が必要であることを指摘してきた。しかし本研究の結果は、MPISの利用は作目と農業経営規模という二つの地域的条件に大きく規定されることを示している。この結果から、MPISの事業地域

は、より大きい地域に多様な形態の情報を配信していくことが
 適当であると考えられる。そして情報化の地域差という視点は、
 日本における他の地域情報化政策にも適応しうることが展望さ
 れる。

真宗卓越地域における仏教信仰と地域社会

福井県嶺北地方の二村落の比較を通して

地理学専攻 藤村健一

宗教地理学では、分布研究が重要な分野である。だが、これ
 まで日本では寺院や信者をみただけの単純な分布研究が多く、
 宗教分布と地域の社会的特性との関係に着目したものは無い。
 本稿では、仏教の各宗派のうち特に真宗に着目し、真宗寺院が
 数の上で卓越している福井県嶺北地方を対象地域とする。まず、
 この地方における寺院が立地する大字（D I Dを含むものを除
 く）を、(一)一ヶ寺立地とするものと、(二)数ヶ寺立地するものに
 分類する。次に(一)の事例として大字蔵作（美山町）を、(二)の事
 例として大字鹿俣（福井市）をそれぞれ選ぶ。両大字は、地形
 環境や戸数などが近似している。これらの大字で住民や寺院の
 住職に対して聴き取りを行って、住民個々の宗教的行動や地域
 社会への参加の頻度、住職の檀家に対する態度などを明らかに
 する。この結果の比較を通して、(一)・(二)の各タイプについて、
 仏教信仰や寺院と地域社会との相互関係の類型化を試みる。

寺院が一ヶ寺立地する蔵作では、全ての家が地元の寺院の檀

家であり、檀家集団と大字の区組織とが事実上同じものになっている。ここでは鹿俣に比べ、家単位でみた住民の宗教的行動や地域社会への参加の頻度が高い。宗教的行動と地域社会への参加との間には、正の相関性が見られる。寺院が数ヶ寺立地する鹿俣では、各家が主に同族関係に基づいて、複数の寺院の檀家集団に分かれています。しかしながら、住民は檀那寺以外の大字内の寺院にも「義理参り」を行うなどの関係を持っている。

こつしたことから、(一)のタイプの大字では、殆どの家が内部の寺院の檀家であるので、寺院はあたかも「村の氏寺」のように地域社会の庇護を受け、各家は地域社会の共同体的規制を受けて寺院行事へ盛んに参加するようになると思われる。また、住民が「村の氏寺」の行事へ参加することで、地域社会の結束が強化される。一方、(二)のタイプの大字では、各家が複数の檀家集団に分かれ、檀家集団と地域社会の関係は比較的薄くなる。そのため、寺院行事や地域社会に対する住民の参加の頻度は低いと考えられる。しかし、複数の寺院や檀家集団が一つの地域社会の中で共存していくために、住民は檀那寺以外の大字内の寺院とも何らかの関係を築いていると思われる。

技術発達からみた明治以降の京友禅業における生産地域の拡大と変遷について

地理学専攻 山田伸之

(本研究の目的・方法)

近年、工業地理学の分野における伝統工業研究の関心は、新たな生産技術の導入に伴う伝統工業地域の変化に集まっている。しかし、これらの研究の対象となった産業の類型区分について着目すると、「大都市型」「農村型」の概念に区分される産業であり、新技術の導入に伴う生産構造の変化がより著しいと考えられる。「大都市型」の伝統工業を対象とした研究は少ない。そのため、本研究では「大都市型」の伝統工業として京都市の京友禅業を取り上げ、新技術の導入に伴う生産・流通構造の変容と、生産地域の変遷と拡大について考察することを目的とした。方法としては、まず明治二十八年から平成十三年までの五つの年次における業者の立地を元学区別に確認し、生産地域の形成過程を検討した。次に各染色技法別に変遷・拡大された事例として元学区を選定し、聞き取り調査を行い、これらの結果を中心に考察を行った。

(結果と考察)

京友禅業は、手描友禅の開発に起源をもち、その後、大量生産に適應できる新技術を三度(型友禅・機械染色・広巾友禅)に渡つて開発・導入してきた。これらの新技術の導入は、京友禅業における生産・流通構造の変容をもたらした。伝統的な色彩の濃い手描友禅や型友禅においては、製品の流通の大半を室町問屋が担い、生産・流通構造上の室町問屋が果たす役割は非常に重要である。しかし、最も製品の大量生産が可能な機械染色や広巾友禅では、製品の発注や流通は大阪の紡績・商社が大半を担い、その生産・流通構造に対して室町問屋の影響はほとんどみられない。これらのことから、大量生産に適應できる染色技術ほど、生産・流通構造上における室町問屋の影響は弱くなる」と指摘できる。

また、新技術の導入は、京友禅業における生産地域の拡大と変遷に大きく影響を与えてきた。手描友禅と型友禅では、特に安価な地代、室町問屋との近接性、そして大正十四年の都市計画法による堀川周辺での新規開業の困難さが要因となって、特に右京区へと生産地域が変遷・拡大していった。これら手描友禅・型友禅に対して、生産・流通構造上における問屋の影響を受けにくい機械染色や広巾友禅では、室町問屋との近接性は考慮されないため、機械染色では広大な敷地が安価で入手しやすい南区に生産地域が形成されていった。また、機械染色ほどで

はないが広い敷地が必要な広巾友禅では、型友禅の業者の進出がそれ以前にあつた左京区に生産地域が形成されていった。

以上のことより、京友禅業においては、染色技術の発達に伴い大量生産に適した新技術を導入するための条件を満たせる地域へと、生産地域が変遷し拡大していったと考えられる。

ラーマ五世紀後半における華人秘密結社

近代化と社会秩序再編

人文総合科学インスティテュート

(地域文化領域) 黒田朋博

十九世紀において華人は、当時の分権的間接的統治システムの中で華人社会の統治も華人首長に大きな権限を委ねるといふ高度な自律性をもっていた。華人首長は、同時に経済的成功者であり、「秘密結社」の指導者であるため、華人社会において発揮される権力と権威の高さに着目して、「秘密結社」をタイ政府は積極的に有効利用していた。さらに十九世紀バンコクの華人社会においては、寺院と「秘密結社」が社会的結合と相互扶助の一般的形態であった。

華人「秘密結社」内部の儀礼と活動は、犯罪や騒動を示唆する。このことは、十九世紀末から二十世紀初頭における華人「秘密結社」を「犯罪組織」として断罪する根拠となっている。しかし、「秘密結社」の活動が公然となるのは、犯罪関連で警察に取り締まりを受けた時に限定される。提供された情報のうち犯罪に関連したものが多いのはこのためである。これは同

時に相互扶助団体の存在を隠蔽する効果があり、二重の意味で犯罪組織としての印象を強めることになった。

西洋人のまなざしは、華人「秘密結社」を悪の集団とする性格付けを決定づけた。現実に生じた犯罪や騒動を通じて危険団体であると察知した西洋人は、その淵源を秘密にもとめ、悪しき秘密を有しているために、華人「秘密結社」は悪であると考えた。秘密は決して公開されないのが西洋人は不安に曝されたが、深刻な実害がないので神秘性に転化し、娯楽として好奇心を充足させるために、華人「秘密結社」の負性は再生産され続けねばならなかった。さらにこの認識は、タイ人エリートにも受け入れられるようになった。

十九世紀後半にラーマ五世によって進められた近代化は、華人「秘密結社」を統治上の障害物に変化させた。「文明化」を掲げた近代化は、一君万民体制による王権強化を実現するもので、既存の中間組織の撤廃を企図し、華人にとつての中間組織である「秘密結社」の解体は必至だった。華人「秘密結社」をめぐる問題は、タイ政府による統制が行き届かないという深刻なもので、華人の自律性を切り崩して弱体化を促す対策が取られた。同時進行で、個人レベルでの干渉を開始し、華人直接統治への端緒を開いた。それでも単に統治の障害であることは、華人「秘密結社」全体が悪を意味することにはならない。むしろイメージ戦略としての色彩が強く、「悪の一掃」をスローガ

ンとすることが中間組織である華人「秘密結社」の解体を正統化することを示した。こうして華人「秘密結社」は秘密結社法により「悪の一掃」を大義名分として非合法化された。